

## 9.9 動物

### 9.9.1 調査

#### (1) 調査内容

調査項目及び調査時期は表 9.9-1 に示すとおりである。動物は、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、水生生物(魚類、底生動物)を対象とした。

調査地域は計画地周辺 200m の範囲を基本とし、図 9.9-1 に示す範囲とした。なお、各調査項目の任意調査において、調査範囲全域を踏査するが、民地には原則として立ち入らないこととした。

表 9.9-1 調査時期

調査項目		調査時期											
		平成 29 年						平成 30 年					
		初夏		夏		秋		冬		早春		春	
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
動物	哺乳類			●		●			●			●	
	鳥類	●				●			●			●	
	爬虫類	●				●						●	
	両生類	●				●				●			
	昆虫類			●		●						●	
	水生	魚類	●				●		●				
	生物	底生動物	●				●		●				

※保全すべき種については、季節変化や生活史等を考慮して、適切な時期に調査を行った。

## (2) 調査実施概要

調査実施概要は表 9.9-2 に示すとおりである。

表 9.9-2 調査実施概要

調査季節	分類群	調査実施日	調査内容
初夏	鳥類	平成 29 年 6 月 25 日	ラインセンサス法、定点観察法、任意観察法
	爬虫類・両生類	平成 29 年 6 月 25 日	任意観察法
	水生生物	平成 29 年 6 月 25 日	任意採集法
夏季	哺乳類	平成 29 年 8 月 20～21 日	目撃法、フィールドサイン法、ライブトラップ法、無人撮影法
	昆虫類	平成 29 年 8 月 20～21 日	任意採集法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法
秋季	哺乳類	平成 29 年 10 月 9～10 日	目撃法、フィールドサイン法、ライブトラップ法、無人撮影法
	鳥類	平成 29 年 10 月 10 日	ラインセンサス法、定点観察法、任意観察法
	爬虫類・両生類	平成 29 年 10 月 9～10 日	任意観察法
	昆虫類	平成 29 年 10 月 9～10 日	任意採集法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法
	水生生物	平成 29 年 10 月 10 日	任意採集法
冬季	哺乳類	平成 30 年 1 月 29～30 日	目撃法、フィールドサイン法、ライブトラップ法、無人撮影法
	鳥類	平成 30 年 1 月 29～30 日	ラインセンサス法、定点観察法、任意観察法
	水生生物	平成 29 年 12 月 4 日	任意採集法
早春季	両生類	平成 30 年 3 月 30 日	任意観察法
春季	哺乳類	平成 30 年 5 月 10～11 日	目撃法、フィールドサイン法、ライブトラップ法、無人撮影法
	鳥類	平成 30 年 5 月 10～11 日	ラインセンサス法、定点観察法、任意観察法
	爬虫類	平成 30 年 5 月 10～11 日	任意採集法
	昆虫類	平成 30 年 5 月 10～11 日	任意採集法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法

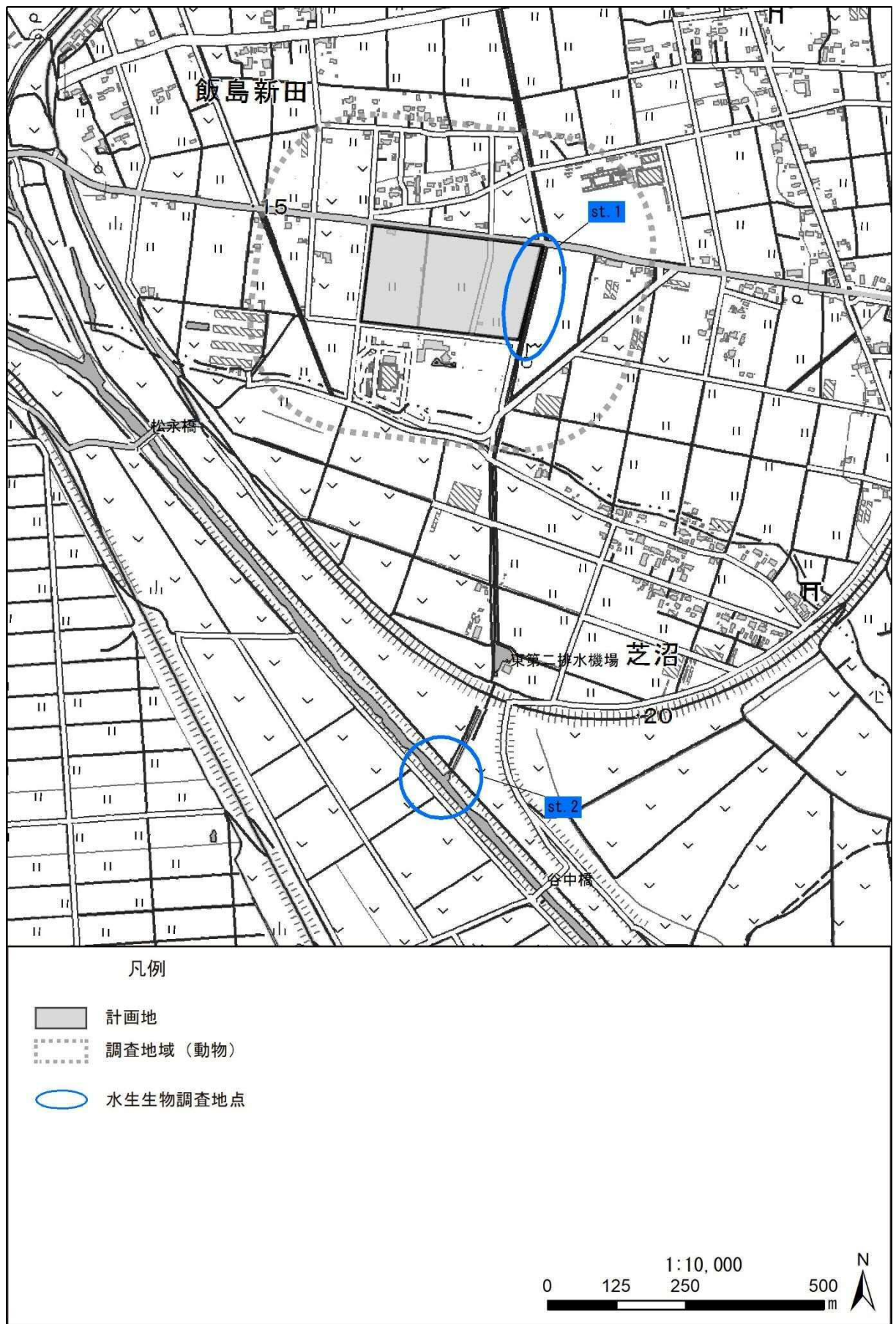


図 9.9-1 動物の調査地域

### (3) 調査方法

#### (a) 哺乳類

調査地域を対象に、目撃法及びフィールドサイン法、トラップによる捕獲法、無人撮影法により哺乳類の生息状況を把握した。哺乳類の調査地点は図 9.9-2 に示すとおりである。

#### (ア) 目撃法、フィールドサイン法

調査範囲の地形、植生、土地利用等を考慮し、調査範囲を任意に踏査し、個体の目撃およびフィールドサイン(足跡、糞、食痕、巣等)の確認及び個体の目視を行った。

記録は、確認もしくは推定される種名、個体数等を記録した。

#### (イ) トラップによる捕獲法

痕跡が残りにくく、痕跡があっても種の判別が難しいネズミ类等小型哺乳類を対象にトラップによる捕獲確認を行った。トラップ設置地点は、調査範囲の地形、土壌の状態、植生、土地利用等を考慮し、出来るだけ多くの種を確認できるよう留意して設定した。

捕獲に用いるトラップは、生け捕り型のライブトラップを基本とした。

トラップの設置数は1地点につき20個とし、設置期間は1晩とした。

#### (ウ) 無人撮影法

水周りや開けた場所、通り道など、主要な箇所でも無人撮影法(センサーカメラ)を併用して調査を行った。センサーカメラの設置数は1地点につき1台とし、設置期間は連続30日程度とした。



<フィールドサイン法>



<無人撮影法>



<ライブトラップ法>





図 9.9-2 哺乳類調査地点

## (b) 鳥類

調査地域を対象に、ラインセンサス法、定点観察法、任意観察法により鳥類の生息状況を把握した。鳥類の調査地点は図 9.9-3 に示すとおりである。

### (ア) ラインセンサス法

調査地域内で定めたルートを時速 1～2km 程度で歩行しながら、片側約 50m(両側 100m)の範囲内で個体、鳴き声等により確認された種について、確認種および個体数を記録した。

### (イ) 定点観察法

調査地域の環境を網羅する見通しが良い場所やある特定の環境に調査定点を定め、地上型望遠鏡等を用いて、一定時間(30 分間)に出現した個体、鳴き声等により確認された種について、確認種および個体数を記録した。

### (ウ) 任意観察法

ラインセンサス法及び定点観察法による調査以外の場所及び時間において、任意で確認された種の種類、個体数を記録した。



<ラインセンサス法>



<定点観察法>



<任意観察法>



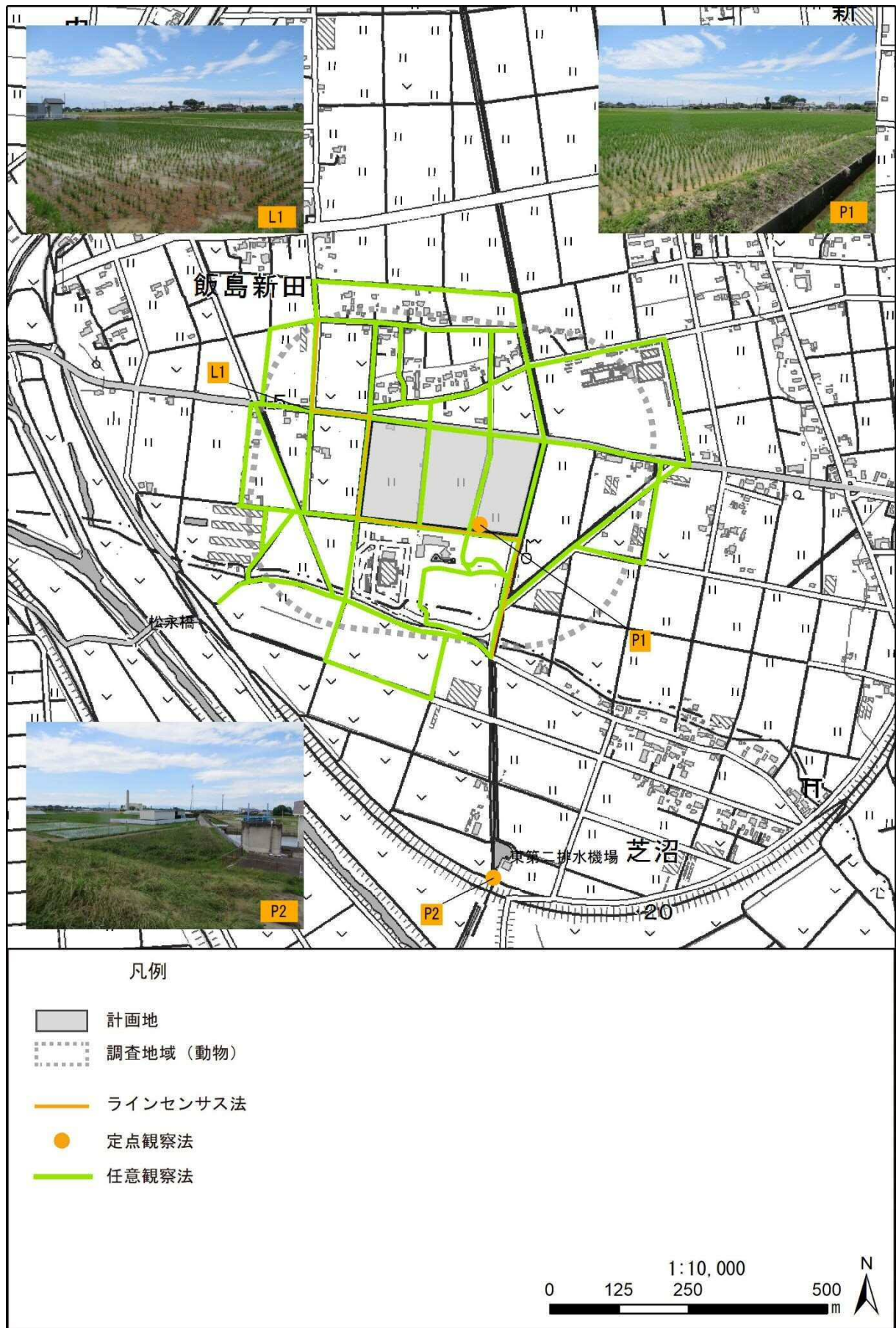


図 9.9-3 鳥類調査地点

### (c) 爬虫類・両生類

調査地域を対象に、任意観察法により爬虫類・両生類の生息状況を把握した。調査地域内を可能な限り詳細に踏査し、各種の卵塊、幼体、成体あるいは死体、抜け殻等を探索し、確認された爬虫類・両生類の種名、個体数(卵塊の場合は卵塊数)等を記録した。

水辺環境では、タモ網等を用いて卵塊や幼生の確認を行った。両生類については、鳴き声により種名や個体数を確認した。また、他項目の調査中に確認された場合も含め、随時、記録した。爬虫類・両生類の調査地点は図 9.9-4 に示すとおりである。



<任意観察法>



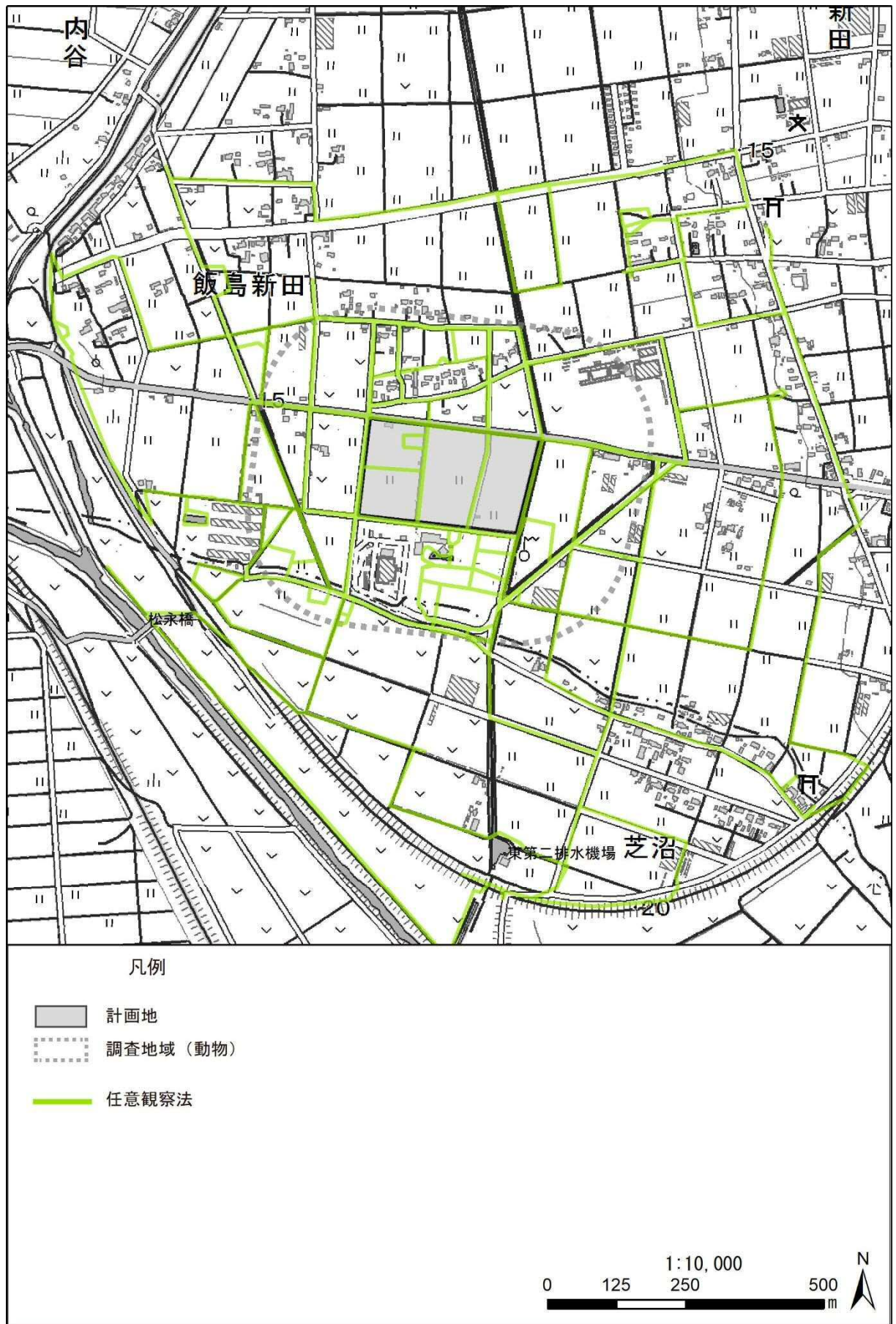


图 9.9-4 爬虫類・両生類調査地点

#### (d) 昆虫類

調査地域を対象に、任意採集法、目撃法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法により昆虫類の生息状況を把握した。昆虫類の調査地点は図 9.9-5 に示すとおりである。

##### (ア) 任意採集法、目撃法

調査地域を任意に踏査し、目撃・見つけ採り、捕虫網を用いたスウィーピング・ビーティング等により確認された種名、個体数等を記録した。採集した昆虫類等は、持ち帰り、室内にて同定を行った。なお、現地で目撃、鳴き声で確認した種も記録した。

##### (イ) ライトトラップ法

調査地域に調査地点を設定し、夜間、光に集まる昆虫類の確認を目的に、4～6W 程度の光源(昼光色蛍光灯及び紫外線灯)を使用したトラップ(ボックス法)を1地点に1台設置した。捕虫器には光源の下にロートを接合したバケツを使用した。光源は夕方より点灯し、捕虫器は翌朝回収した。なお、可能な限り調査地区が設定された環境に依存性の高い種が採集されるように、ボックス法を採用した。

##### (ウ) ベイトトラップ法

調査地域に調査地点を設定し、主に地表を徘徊する昆虫類の確認を目的に、餌(乳酸飲料・酒、腐肉、さなぎ粉等)を入れたプラスチックコップを、1地点につき20個埋設した。プラスチックコップは、地表面と同じ高さになるように埋設し、一晩放置した後、落下した個体を回収した。



<任意採集法>



<ライトトラップ法>



<ベイトトラップ法>







図 9.9-5 昆虫類調査地点  
9.9-11



### (e) 水生生物

調査地点を対象に、任意採集法により魚類・底生動物の生息状況を把握した。水生生物の調査地点は図 9.9-6 に示すとおりである。

#### (ア) 魚類

計画地東側水路の排水口付近及び下流の市野川合流部付近において、投網、タモ網、セルびん等を用いて生息する魚類を捕獲し、種及び個体数を記録した。なお、現地で同定が困難な種については、持ち帰り室内で同定した。

#### (イ) 底生動物

計画地東側水路の排水口付近及び下流の市野川合流部付近において、タモ網等を用いて生息する底生動物を採集した。なお、現地で同定が困難な種については、固定資料として持ち帰り、室内で種の同定および個体数を記録した。



<任意採集法(タモ網・投網)>



図 9.9-6 水生生物調査地点

#### (4) 調査結果

##### (a) 哺乳類

##### (ア) 確認種

現地調査の結果、哺乳類は3目6科7種が確認された。確認種一覧は表9.9-3に示すとおりである。なお、初夏季及び早春季は他項目調査時の確認である。

調査地域の環境は主に平地の耕作地で、パッチ状に分布する樹林地と周囲を流れる水路や河川が存在する。調査地域の環境を反映し、主に平地でみられる種が確認された。

主に耕作地周辺で、アズマモグラの杭道やホンドタヌキの足跡、ホンドキツネやハクビシンの糞等が確認された。そのほか、特定外来生物のアライグマの足跡が確認された。また、耕作地周辺のライブトラップでアカネズミが確認された。

表 9.9-3 確認種一覧(哺乳類)

No.	目名	科名	種名	学名	調査季節					
					初夏季	夏季	秋季	冬季	早春季	春季
1	モグラ目 (食虫目)	モグラ科	アズマモグラ	<i>Mogera imaizumii</i>		9	10	5		5
2	ネズミ目 (齧歯目)	ネズミ科	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>						1
		ネズミ科		Muridae		5		1		8
3	ネコ目	アライグマ科	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	1	1	10	19	6	9
4	(食肉目)	イヌ科	ホンドタヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides viverrinus</i>		7	20	16	10	11
5			ホンドキツネ	<i>Vulpes vulpes japonica</i>			9	16		6
6		イタチ科	ホンドイタチ	<i>Mustela itatsi itatsi</i>			3	3		1
			イタチ科		Mustelidae			3		
7		ジャコウネコ科	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>			2	1		2
3目6科7種					1種	4種	6種	7種	2種	7種

注1) 種名・配列は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（平成29年度版）、国土交通省」に準拠した。

注2) 数字は確認例数もしくは確認個体数を示す。

注3) 初夏季及び早春季は他項目調査時の確認。



<ホンドタヌキ>



<ホンドイタチ>

##### (イ) 重要種

現地調査の結果、哺乳類の重要種は確認されなかった。



(b) 鳥類

(ア) 確認種

現地調査の結果、鳥類は12目28科50種が確認された。確認種一覧は表9.9-4に示すとおりである。

調査地域は平地で、草地や水田環境が広がり、パッチ状に存在する樹林地、耕作地周囲を流れる水路や河川が存在する。調査地域の環境を反映し、主に平地の草地や水田周辺でみられる種が確認された。

草地環境ではオオヨシキリやセッカ、ホオジロ等、水田環境ではアマサギやゴイサギ、アオサギ、河川周辺ではコガモやカワウ等が確認された。また、チュウヒやチョウゲンボウなど農耕地等に生息する猛禽類が確認された。パッチ状に分布する小規模な樹林地では、コゲラやシジュウカラ等が確認された。そのほか、特定外来生物のガビチョウが確認された。



〈カワラヒワ〉



〈モズ〉



〈カワセミ〉



〈ハクセキレイ〉



〈カルガモ〉



〈ダイサギ〉

表 9.9-4 確認種一覧(鳥類)

No.	目名	科名	種名	学名	調査季節			
					初夏季	秋季	冬季	春季
1	ペリカン目	ウ科	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	1	5	2	1
2	コウノトリ目	サギ科	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	1	1		
3			アマサギ	<i>Bubulcus ibis</i>	12			
4			ダイサギ	<i>Egretta alba</i>		3		1
5			コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	1			
6			アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	4	2		1
7	カモ目	カモ科	カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>	12	7		6
8			コガモ	<i>Anas crecca</i>			1	1
9	タカ目	タカ科	トビ	<i>Milvus migrans</i>	1	1	1	1
10			オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	1	1		1
11			ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	1	2	4	
12			チュウヒ	<i>Circus spilonotus</i>				1
13		ハヤブサ科	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	2	5	2	
14	キジ目	キジ科	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i>				2
15			キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	1	2		3
16	チドリ目	チドリ科	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	1			4
17			タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>			2	
18		シギ科	キアシシギ	<i>Heteroscelus brevipes</i>				18
19			イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>		1		
20	ハト目	ハト科	ドバト	<i>Columba livia var. domesticus</i>	3	181	28	29
21			キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	8	3	5	11
22	カッコウ目	カッコウ科	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>				1
23	アマツバメ目	アマツバメ科	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>				1
24	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>		4		
25	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	2			
26	スズメ目	ヒバリ科	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	4	2		10
27		ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	7			5
28		セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>				1
29			ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	3	4	4	4
30			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>		1	1	2
31			ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>			1	
32		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>		12	3	2
33		モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	1	5	2	4
34		ツグミ科	ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>			4	1
35		チメドリ科	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	1			1
36		ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>				1
37			オオヨシキリ	<i>Acrocephalus arundinaceus</i>	1			4
38			セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>	1			2
39		シジュウカラ科	シジュウカラ	<i>Parus major</i>	1	1	1	4
40		メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>		1	4	1
41		ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	2	2	9	2
42			カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>			4	
43		アトリ科	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	3		20	9
44			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>			2	
45		ハタオリドリ科	スズメ	<i>Passer montanus</i>	13	115	13	43
46	ムクドリ科	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	23	82	5	47	
47	カラス科	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>		2			
48		オナガ	<i>Cyanopica cyana</i>	1			1	
49		ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	2	2	50	7	
50		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	2	15		8	
12目28科50種					30種	27種	23種	37種

注1) 種名・配列は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(平成29年度版)、国土交通省」に準拠した。

注2) 数字は確認例数もしくは確認個体数を示す。

(イ) 重要種

現地調査の結果、重要種はアマサギやコサギ等のサギ類や、タゲリやイソシギなどのシギ・チドリ類、チュウヒやチョウゲンボウ等の猛禽類など、13種が確認された。重要種一覧は表 9.9-5、調査季節別の重要種確認位置は図 9.9-7(1)～(4)、重要種の生態及び確認状況は表 9.9-6(1)～(13)に示すとおりである。

表 9.9-5 重要種一覧(鳥類)

No.	目名	科名	種名	調査季節				重要種選定基準					
				初夏季	秋季	冬季	春季	①	②	③	④		
1	コウノトリ目	サギ科	アマサギ	12								LP(繁)	
2			コサギ	1								NT2(繁)	
3	タカ目	タカ科	トビ	1	1	1	1					DD(繁)	
4			オオタカ	1	1		1			NT		VU(繁,越)	
5			ノスリ	1	2	4						NT2(繁,越)	
6			チュウヒ				1		国内	EN		EN(越)	
7			ハヤブサ科	チョウゲンボウ	2	5	2						NT2(繁)
8			チドリ目	チドリ科	タゲリ			2					
9	シギ科	イソシギ			1							VU(繁)	
10	カッコウ目	カッコウ科	カッコウ				1					NT2(繁)	
11	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ		4							RT(LP)(繁)	
12	スズメ目	ウグイス科	オオヨシキリ	1			4					NT2(繁)	
13		ホオジロ科	ホオジロ	2	2	9	2					RT(NT2)(繁)	
6目9科13種				8種	7種	5種	6種	0種	1種	2種		13種	

注1) 種名・配列は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(平成29年度版)、国土交通省」に準拠した。

注2) 数字は確認例数もしくは確認個体数を示す。

注3) カワセミは埼玉県レッドデータブック2018のRTに該当し、地帯別評価(荒川以西)ではLPに該当する。

注4) ホオジロは埼玉県レッドデータブック2018のRTに該当し、地帯別評価(荒川以西)ではNT2に該当する。

注5) ウグイスは埼玉県レッドデータブック2018のRTに該当するが、地帯別評価(荒川以西)では評価外となる。

【重要種選定基準】

①: 「文化財保護法」(昭和25年法律第214号、文化庁)に基づく天然記念物、特別天然記念物

②: 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年法律第75号、環境省)により希少野生動植物種に指定された種

③: 「環境省レッドリスト2018」(平成30年5月22日、環境省報道発表資料)に選定された種

CR: 絶滅危惧 I A類 / EN: 絶滅危惧 I B類 / VU: 絶滅危惧 II 類 / NT: 準絶滅危惧種 / DD: 情報不足種

LP: 絶滅のおそれのある地域個体群

④: 「埼玉県レッドデータブック2018動物編」(埼玉県、平成30年)

EX: 絶滅 / EW: 野生絶滅 / CR+EN: 絶滅危惧 I 類 / CR: 絶滅危惧 I A類 / EN: 絶滅危惧 I B類 / VU: 絶滅危惧 II 類

NT: 準絶滅危惧 NT1: 準絶滅危惧1型 / NT2: 準絶滅危惧2型 / DD: 情報不足 / LP: 地域個体群 / RT: 地帯別危惧

繁: 繁殖鳥 / 越: 越冬鳥



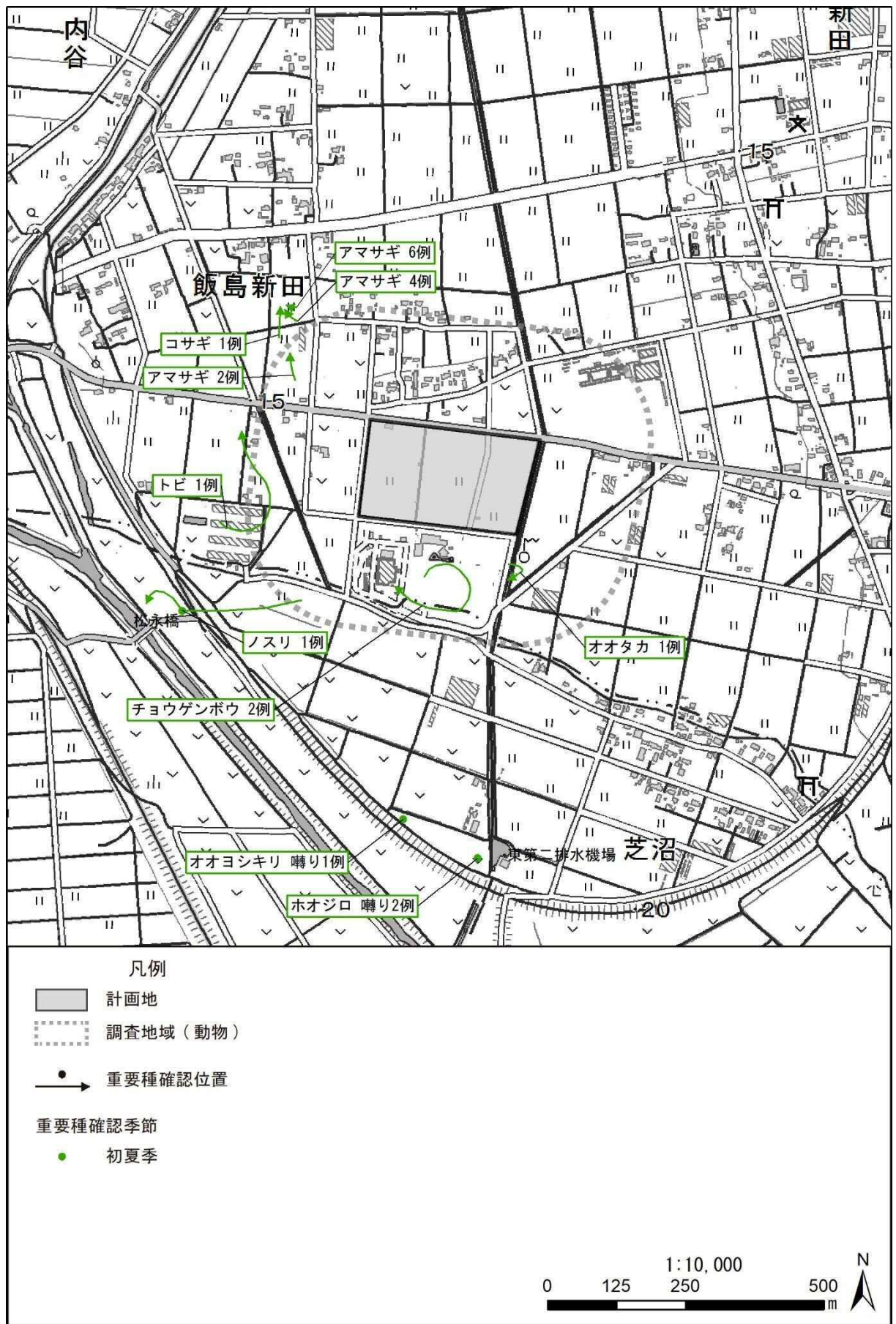


図 9.9-7(1) 重要種確認位置(鳥類 初夏)

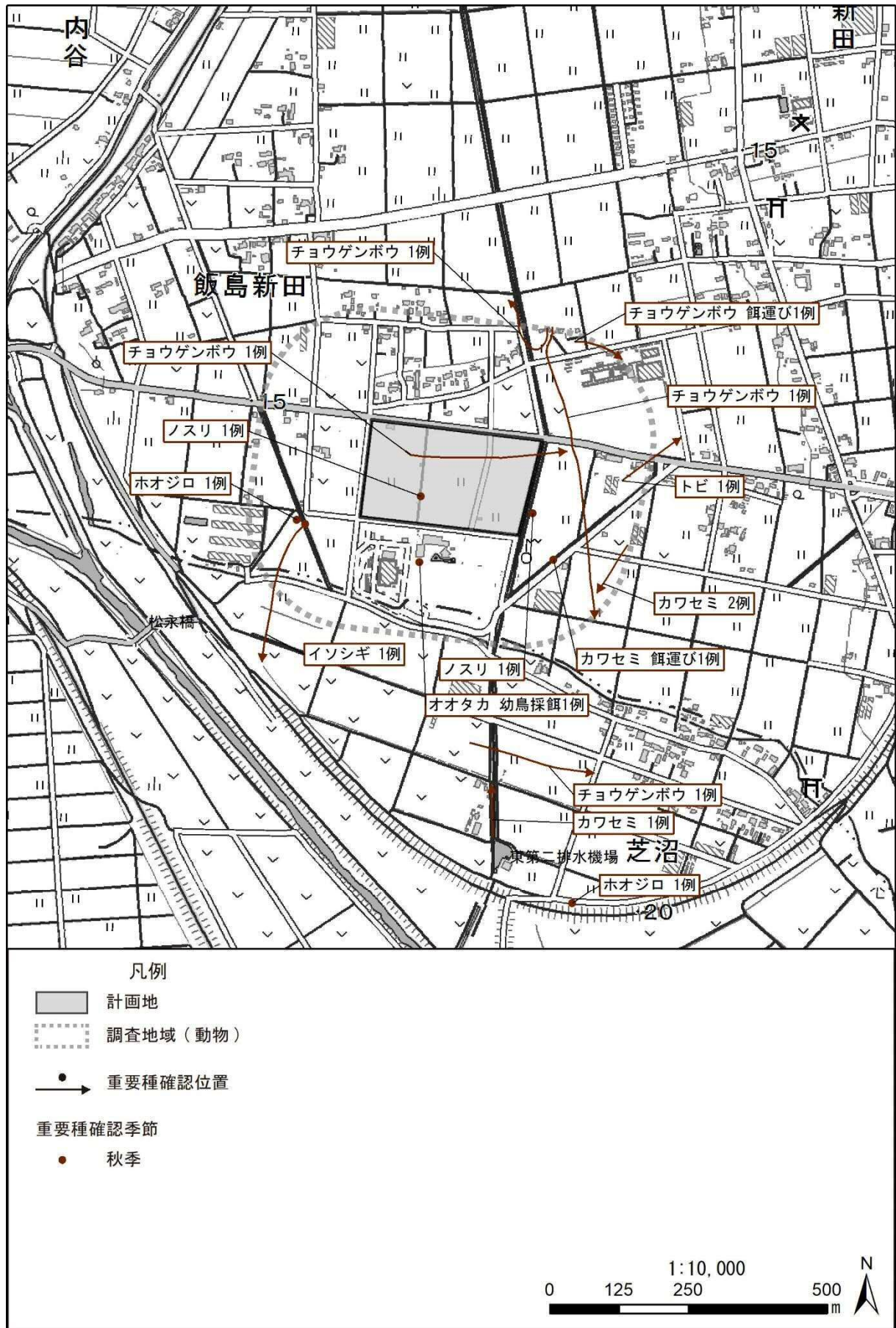


図 9.9-7(2) 重要種確認位置(鳥類 秋季)



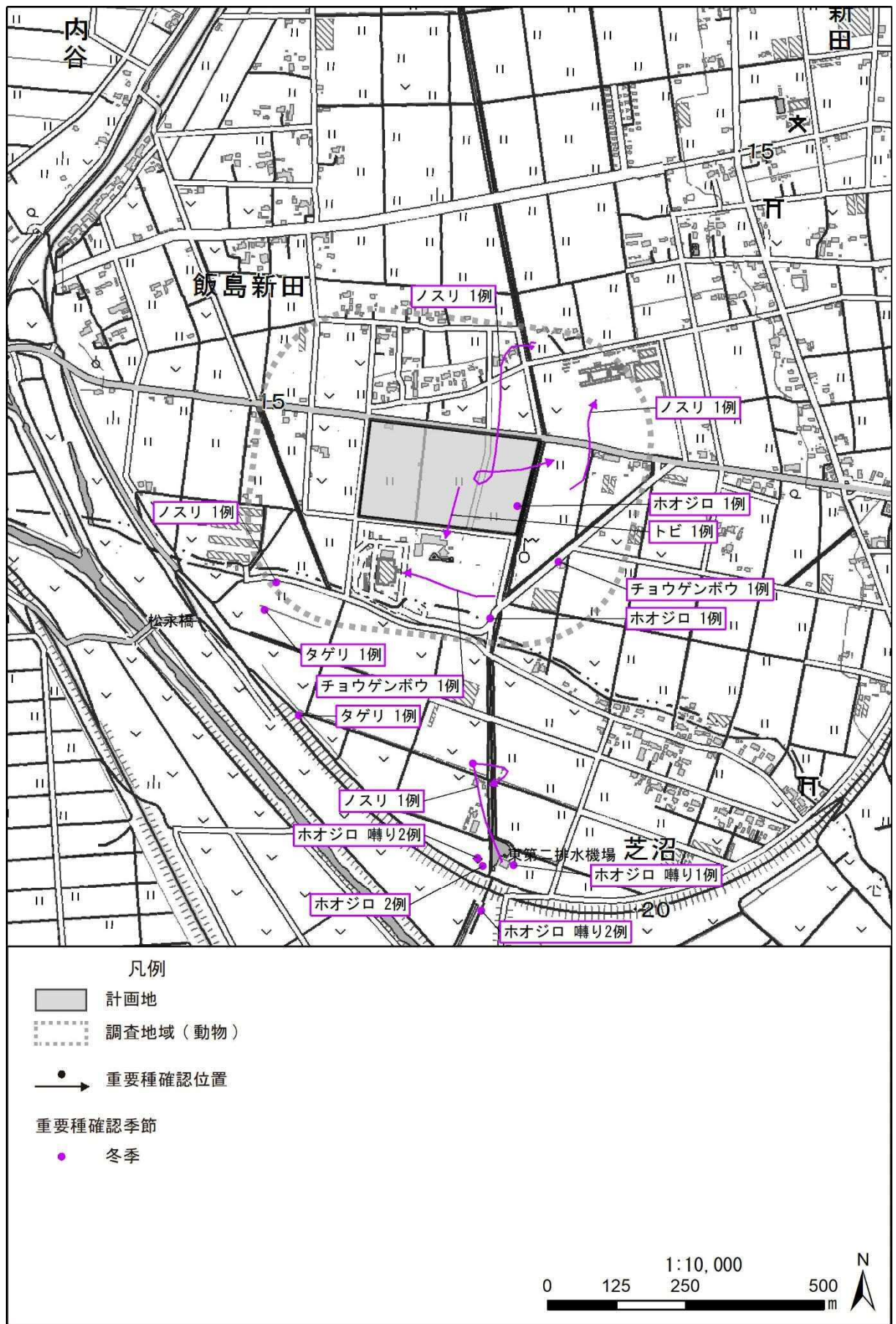


図 9.9-7(3) 重要種確認位置(鳥類 冬季)

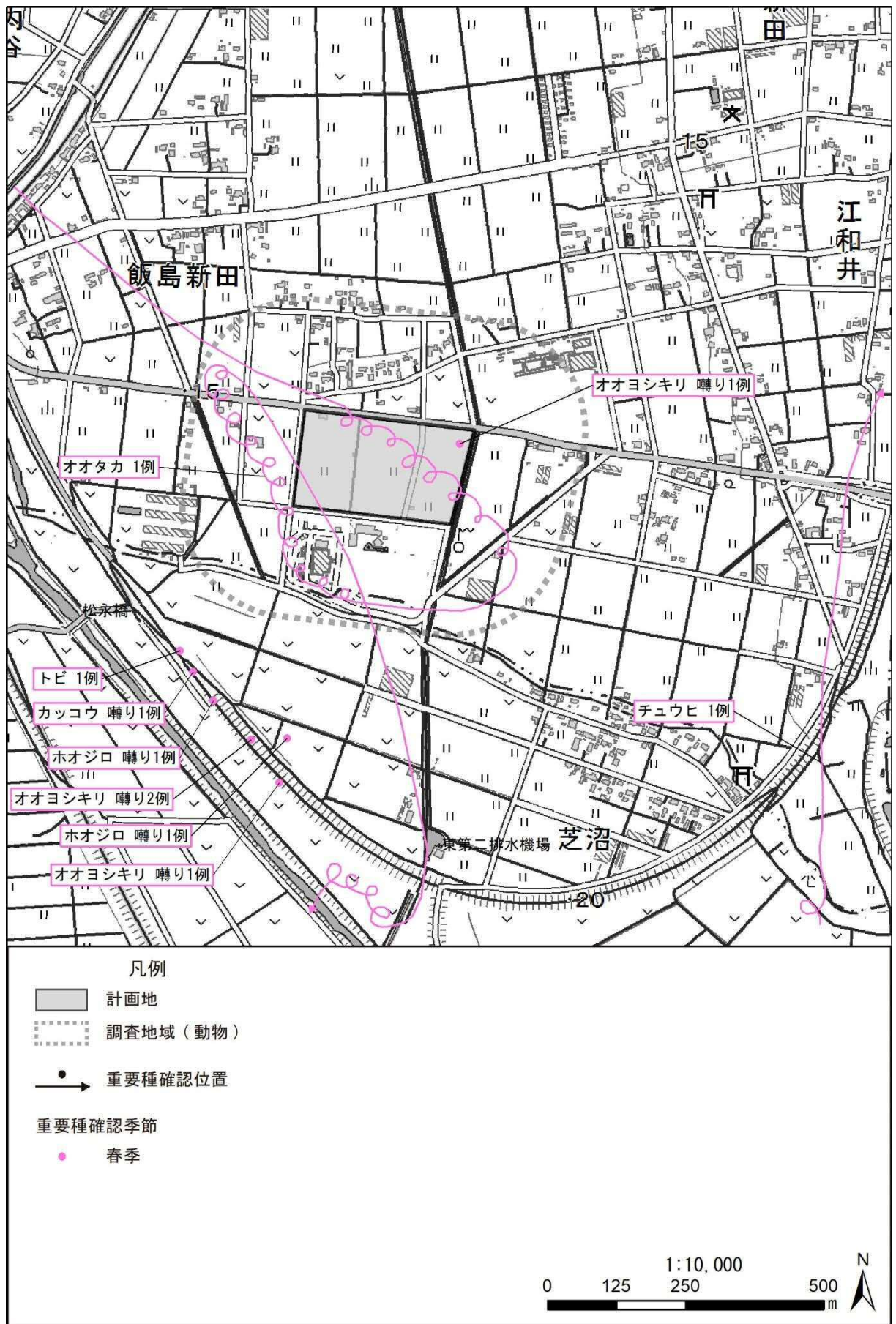


図 9.9-7(4) 重要種確認位置(鳥類 春季)





表 9.9-6(1) 重要種生態(鳥類)

科名	サギ科		
種名	アマサギ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	地域個体群(繁殖)	
分布状況	【国内分布】夏鳥として日本に渡来し本州、中国、四国で繁殖する。南西諸島では冬鳥。		確認個体
形態・生息場所	<p>【形態】全長46～56cm、翼開長88～96cm。シラサギといわれる白いサギの中で最も小型のもので首が短い。夏羽では上半身と背の飾り羽が亜麻色になる。冬羽では全身が白くなる。嘴は黄色く短い。</p> <p>【主な生息環境】水田、牧場、草地など。英語でCattle (畜牛) Egret (サギ) と言われるように、牧場で牛の背に乗っているところがよく見られる。</p>		
県内での生息状況	県内では主に低地帯の水田で観察されていたが確認数は減少している。繁殖期はサギ類のコロニー内に混じり営巣している。繁殖期をすぎるとチュウサギなどと共に水田で群れになっているところが観察されるが多くない。		確認環境
現地確認状況	主に水田及びその周辺で初夏に12例が確認された。		



注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)

表 9.9-6(2) 重要種生態(鳥類)

科名	サギ科		 <p>「日本の野鳥650」 (平凡社、平成27年)</p>
種名	コサギ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	準絶滅危惧2型(繁殖)	
分布状況	【国内分布】留鳥で本州、四国、九州で繁殖し全国で記録がある。2015年に沖縄県で繁殖したという情報がある。		
形態・生息場所	<p>【形態】全長55～65cm、翼開長90～105cm。全身が白く、嘴が長めで趾が黄色いサギである。夏羽では白い冠羽があり飾り羽が見られる。嘴は一年中黒い。水の中で足を小刻みに震わせ、餌を追い出して捕らえる姿が見られる。</p> <p>【主な生息環境】水田、河川、湖沼、干潟、湿地で見られ主に小魚を捕る。</p>		 <p>確認環境</p>
県内での生息状況	<p>通年、県内各地の水田、河川、湖沼、湿地で見られるが、最近著しく減少している。オオクチバスやカワウなどが小魚を捕食することから、本種の餌資源の減少が原因のひとつとして指摘されている。</p>		
現地確認状況	主に水田及びその周辺で初夏季に1例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)

表 9.9-6(3) 重要種生態(鳥類)

科名	タカ科		 <p style="text-align: center;">確認個体</p>
種名	トビ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	情報不足(繁殖)	
分布状況	【国内分布】留鳥として九州以北に普通に生息する。		
形態・生息場所	<p>【形態】全長オス58.5cm、メス68.5cm、翼開長157～162cm。大型の猛禽類でカラスに比べてかなり大きい。全身赤味のある黒褐色で、翼の下面風切り羽の元の部分に白い斑がある。尾は凹型をしている。</p> <p>【主な生息環境】平地から高山にかけて市街地、海岸、湖沼など幅広い場所で見られる。</p>		 <p style="text-align: center;">確認環境</p>
県内での生息状況	【県内での生息環境】低地帯から低山帯に留鳥として生息する。利根川や荒川等の河川敷や広い農耕地などで多く見られるが、特に渡良瀬遊水地には多い。入間市、鴻巣市では繁殖が確認されており、現在は各地で増加傾向にあるが不明な点も多い。移動時期や冬季には低地でもよく見られている。		
現地確認状況	調査地域上空で飛翔が確認された。初夏に1例、秋季に1例、冬季に1例、春季に1例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)



表 9.9-6(4) 重要種生態(鳥類)

科名	タカ科		
種名	オオタカ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省	準絶滅危惧種	
	埼玉県	絶滅危惧Ⅱ類(繁殖、越冬)	
分布状況	【国内分布】留鳥として北海道、本州、四国、九州に分布し、南西諸島では冬鳥。		確認个体
形態・生息場所	<p>【形態】全長オス50cm、メス58.5cm、翼開長105～130cm。オスは頭上から上面が暗青灰色。眉斑は白く明瞭で虹彩はオレンジ色。下面は白く黒褐色の細かい横縞がある。メスでは褐色味が強く虹彩は黄色い。幼鳥では全身が褐色で下面には縦斑がある。</p> <p>【主な生息環境】平地から山地の林や農耕地などに生息する。現在は市街地のさほど大きくない林で営巣するものもいる。</p>		
県内での生息状況	留鳥として平地から山地の林や農耕地、河川敷などに生息する。かつて、低地帯では冬季でも生息数が少なかったが、現在は低地帯の社寺林や屋敷林などでも営巣するものが増えている。個体数は増加傾向にあるようだが、生息地の環境は必ずしも良くなっていない。		
現地確認状況	調査地域上空での飛翔、及び赤外線カメラにより採餌行動が確認された。初夏に1例、秋季に1例、春季に1例が確認された。		


注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)

表 9.9-6(5) 重要種生態(鳥類)

科名	タカ科		
種名	ノスリ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	準絶滅危惧2型(繁殖、越冬)	
分布状況	【国内分布】 四国以北で繁殖し、留鳥または漂鳥。		確認個体
形態・生息場所	<p>【形態】 全長オス50～53cm、メス53～60cm、翼開長122～137cm。カラスと同じくらいの大きさ。頭から上面は褐色で下面には褐色の斑がある。翼は幅が広く下面は白いが風切り羽の元の部分に褐色の斑がある。また、下腹部にも褐色の幅広い斑がある。</p> <p>【主な生息環境】 山地の森林や岩壁で繁殖するが、低地での繁殖確認が増えている。冬は農耕地、河川敷などの見通しのよい場所で見られる。主に、ネズミ、モグラなどの小型哺乳類を餌とする。</p>		
県内での生息状況	台地・丘陵地で繁殖している他、低地帯での営巣も確認されており動向が注目される。冬は低地帯の農耕地や河川敷などでよく見られるようになってきた。		確認環境
現地確認状況	調査地域上空で飛翔が確認された。初夏に1例、秋季に2例、冬季に4例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)

表 9.9-6(6) 重要種生態(鳥類)

科名	タカ科		
種名	チュウヒ		
重要性	文化財		
	保存法	国内希少野生動植物種	
	環境省	絶滅危惧ⅠB類	
	埼玉県	絶滅危惧ⅠB類(越冬)	
分布状況	<p>【国内分布】冬鳥として全国に渡来する。東北北部、九州、西日本の一部では局所的に繁殖する。</p>		確認個体
形態・生息場所	<p>【形態】全長オス48cm、メス58cm、翼開長113～137cm。オスの羽色には変異が多い。飛翔時、翼がV字型になる。メスは全身褐色で初列風切先端部は黒い。また、風切りと尾には横縞がない。</p> <p>【主な生息環境】平地の河川、湖沼、農耕地、草地、干拓地、ヨシ原などに生息する。</p>		
県内での生息状況	<p>利根川、荒川流域などの低地帯の河川敷やヨシ原、農耕地などに冬鳥として渡来し生息する。現在は、渡来数がやや増加傾向にある。</p>		
現地確認状況	<p>調査地域上空で、春季に1例の飛翔が確認された。</p>		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)



表 9.9-6(7) 重要種生態(鳥類)

科名	ハヤブサ科		
種名	チョウゲンボウ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	準絶滅危惧2型(繁殖)	
分布状況	【国内分布】留鳥として全国に分布し、本州で繁殖する。		<p>確認個体</p>
形態・生息場所	<p>【形態】全長オス33cm、メス38.5cm、翼開長68～76cm。ハトくらいの大きさで尾が長い。上面は茶褐色で黒い斑がある。下面は淡い茶色で縦斑がある。雄は頭部が青灰色。</p> <p>【主な生息環境】本来の営巣地は絶壁等のくぼみである。採食環境として原野や草地等の開けた場所を好む。主食はネズミ、昆虫類だが、自分と同じ大きさのキジバトを捕らえることもある。</p>		 <p>確認環境</p>
県内での生息状況	1980年代頃より、低地帯の高架橋や取水塔のような人口構造物に営巣するようになり、市街地でもよく見られるようになった。さいたま市内のビルではかなり以前から繁殖しているのが知られている。冬季は河川敷や農耕地、草地等の開けた場所でもよく見られる。		
現地確認状況	調査地域上空で飛翔及び餌運び(1例)が確認された。初夏に2例、秋季に5例、冬季に2例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)

表 9.9-6(8) 重要種生態(鳥類)

科名	チドリ科		
種名	タゲリ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	準絶滅危惧2型(越冬)	
分布状況	<p>【国内分布】冬鳥として本州以南に渡来する。北陸地方、関東北部などで繁殖記録がある。</p>		確認个体
形態・生息場所	<p>【形態】全長28～31cm、翼開長82～87cm。胸と頭上は黒く後頭部には長い冠羽がある。背と翼は金属光沢のある緑色。腹面は白く下尾筒はオレンジ色。飛翔時、翼下面の白と風切りの黒がよく目立つ。</p> <p>【主な生息環境】水田、谷津田、畑、河川、牧草地、干潟などに生息する。</p>		
県内での生息状況	<p>かつては冬鳥として県内各地の水田、河川、湖沼等に多く渡来していた。現在は圃場整備に伴い、冬季に水田の乾燥化が進んだこと、湿地の埋め立て、河川や湖沼の改修等により生息環境が悪化したため減少傾向が著しい。荒川(下流域)や利根川の河川敷など渡来地が局所的になっている。</p>		
現地確認状況	水田周辺の草地環境で冬季に2例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)



表 9.9-6(9) 重要種生態(鳥類)

科名	シギ科		 <p>「日本の野鳥650」 (平凡社、平成27年)</p>
種名	イソシギ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	絶滅危惧Ⅱ類(繁殖)	
分布状況	【国内分布】北海道から九州で繁殖。中部地方以北では夏鳥、他の地方では留鳥。		
形態・生息場所	<p>【形態】全長19～21cm、翼開長38～41cm。頭部から上面は褐色で下面は白い。胸の脇から翼の付け根に白い部分が食い込んでいる。</p> <p>【主な生息環境】河川、湖沼、海岸、干潟、河口などに生息する。</p>		 <p>確認環境</p>
県内での生息状況	河川や湖沼などに留鳥として生息する。利根川や荒川などで繁殖するが、現在は夏季の生息数が減少し、繁殖地は局所的となっている。春秋の渡り期には休耕田にも飛来する。		
現地確認状況	水田周辺で秋季に1例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)




表 9.9-6(10) 重要種生態(鳥類)

科名	カッコウ科		 <p>「日本の野鳥650」 (平凡社、平成27年)</p>
種名	カッコウ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	準絶滅危惧2型(繁殖)	
分布状況	【国内分布】夏鳥として九州以北に渡来する。		
形態・生息場所	<p>【形態】全長33～36cm、翼開長50～60cm。ハトより大きくて尾が長い。頭部、胸、上面は青灰色、下面は白く、黒く細い横縞があり一見猛禽類のように見える、これはカッコウ科の鳥に共通する。メスには赤色型がある。</p> <p>【主な生息環境】托卵相手のオオヨシキリ、モズ、オナガ、ホオジロ、ノビタキなどが繁殖する低地から山地にかけて幅広く生息する。住宅地のアンテナ上で鳴く姿を見ることがある。秋の渡りの時期には公園などの街路樹で毛虫を食べる姿が見られる。</p>		 <p>確認環境</p>
県内での生息状況	<p>県内には夏鳥として低山帯から台地・丘陵帯、低地帯に渡来するが、低山帯での生息数は多くない。現在はヨシ原や雑木林の減少等、生息環境の悪化による托卵相手（オオヨシキリ、モズ、オナガ、ホオジロなど）の減少に伴い県内全域で減っている。低地では宿主のオオヨシキリの減少以上に本種の減少傾向が著しい。</p>		
現地確認状況	樹林地で春季に囀り1例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)

表 9.9-6(11) 重要種生態(鳥類)

科名	カワセミ科		
種名	カワセミ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	地帯別危惧(地域個体群 繁殖)	
分布状況	【国内分布】 全国に留鳥として分布する。		確認個体
形態・生息場所	<p>【形態】 全長17cm。上面がコバルトブルーで下面は橙色。メスの下嘴は赤い。</p> <p>【主な生息環境】 河川、湖沼、小川、用水、などの水辺で見られる。土の崖に嘴で巣穴を掘る。水辺に繁殖適地がないと、人が掘った穴の側面や残土等の土盛に巣をつくることがある。</p>		
県内での生息状況	<p>県内の低地帯から低山帯にかけての河川・池沼に周年生息しており、小魚や小さいザリガニ、エビ等を捕らえる。かつて水質悪化のため都市近郊でいなくなったが、水質改善と共に都市河川でも姿がよくみられるようになり繁殖もしている。</p>		確認環境
現地確認状況	水路周辺で秋季に飛翔3例及び餌運び1例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)


表 9.9-6(12) 重要種生態(鳥類)

科名	ウグイス科		
種名	オオヨシキリ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	準絶滅危惧2型(繁殖)	
分布状況	【国内分布】夏鳥として全国に渡来してヨシ原で繁殖する。		確認个体
形態・生息場所	<p>【形態】全長18～19cm。上面はオリーブ褐色。下面はクリーム白色。口内は鮮やかなオレンジ色。</p> <p>【主な生息環境】河川、湖沼、休耕田等のヨシ原。一夫多妻制が知られている。オスのほうがメスよりも早く渡来し、よい縄張りを確保してメスを誘う。巣作りはメスだけが行い、子育ても主にメスが行う。</p>		
県内での生息状況	県内では低地帯のヨシ原を中心に繁殖している。現在は繁殖地である河川敷のヨシが外来種のオオブタクサやアレチウリなどに圧迫され減少しているため、一部に生息数の著しい減少がみられる。		確認環境
現地確認状況	草地周辺で初夏に囀り1例、春季に囀り4例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)



表 9.9-6(13) 重要種生態(鳥類)

科名	ホオジロ科		
種名	ホオジロ		
重要性	文化財		
	保存法		
	環境省		
	埼玉県	地帯別危惧(準絶滅危惧2型 繁殖)	
分布状況	【国内分布】九州以北で繁殖し、冬季には暖地へ移動する留鳥あるいは漂鳥。		確認個体
形態・生息場所	<p>【形態】全長16.5cm。オス成鳥は眉と顎が白く狭まれた頬が黒い、メス成鳥と若鳥は黒い部分が褐色となる。胸は全面茶褐色で、尾羽の外側が白い。</p> <p>【主な生息環境】林縁の藪、植木畑周辺、河川敷の灌木等で繁殖するが、低地帯で繁殖に適する環境が減少している。冬は河川敷等で草本類の種子を採食しているところがよく見られる。</p>		
			確認環境
県内での生息状況	県内では低地帯から山地帯まで留鳥として広く分布するが、現在は特に県南部の荒川沿いや見沼田圃等の低地の繁殖が少なくなっている。		
現地確認状況	耕作地や草地周辺で地鳴きや囀りが確認された。初夏に2例、秋季に2例、冬季に9例、春季に2例が確認された。		

注1) 出典 「埼玉県レッドデータブック動物編2018(第4版)」(埼玉県、平成30年)